

NHK 公共放送を訴えるミニ番組
(遠距離恋愛ドラマ)

「 遠いふたつの場所で 」 作 大岡俊彦

(撮影準備稿 03.1.21)

登場人物

ミカ (25) 木内晶子
隆司 (25) (ミカの彼氏)
上司 (50) (配属先、宮崎県の上司)
祐一 (25) (宮崎県と同僚)

○午後、ミカの部屋（春）

ガラリと窓をあける女（ミカ）。

窓の外では、桜が咲きかけている。

ひとりぐらしの部屋は段ボールが山積み。
テレビをセッティングする彼女。

1、3、4、6、8、10、12とチャ

ンネルを変えても砂嵐。

× × ×

ケータイで電話するミカ。

ミカ 「うん。もう着いた。これから荷物あける。…え、今日東京雪なの？ そうなんだ。

…大丈夫だよ（笑）」

広げられた新聞のテレビ欄。飲みかけのコーヒーをとるミカ。

ミカ 「あ、そうそう。宮崎ってさー、テレビのチャンネルが4つしかないの。知ってた？

…NHK、教育、あとふたつ。（笑）うん、全然違う」

隆司（声） 「でも、NHKなら、東京と一緒にでしょ？」

ミカ 「あ、そうだね。じゃ明日から朝の連ドラは一緒に見ようよ。…まじで？（笑）」

玄関のチャイムが鳴る。一旦電話を切り、対応するミカ。

NHKの集金人が来ている。

受信料を払い、NHKのシールをもらう。

ケータイでの電話を再開。

ミカ 「早速受信料払っちゃった」

シールをいじっている。

隆司（声） 「ちゃんと払ってるねえ」

ミカ 「当たり前じゃん、みんなで支えないとミカVO 「東京に残る隆司より、私は宮崎での

仕事を選んだ。遠距離恋愛になってしまった二人の、きょうが一日目。滑り出しは、我ながら順調だった。」

○夜、ミカの部屋

布団に入っているミカ。電気を消す。

TV (NHK) では天気予報。宮崎は晴れ。東京は雪。

タイトル『遠いふたつの場所で』

○昼、会社

上司 「(宮崎弁で) バカもん！」

声の大きさに驚く同僚達。

その中に悠一。

上司 「いくら新人つつつてもちよつとは東京でやってきたんだろ？ やりなおし！」

たくさん赤の入った原稿を突き返される

ミカ。

ミカ 「わかりました。この赤い所、全部ウラ取って来ます。」

上司 「そりゃ、むりだろ」

ミカ 「それでいいですよね？」

○午後、住宅街

地図を見ながら道に迷うミカ。

スーツの上着を脱いで、汗をぬぐう。

○夜、ミカの部屋

ケータイが鳴っている。隆司からの着信。

資料を広げたまま突っ伏しているミカ。

ケータイをとるが、

ミカ 「ごめん、もうねむい。」

○朝、田舎道(などの、宮崎ならではの風景)

自転車でゆるやかに走るミカ。あくび中。

○昼、会社

会社でメールを眺めるミカ。

メール『隆司 4月18日 仕事中。ごめんね。』

メール『隆司 4月19日 ますます仕事が忙しくなってきた。』

メール『隆司 4月22日 今はダメ。電話待
ってて。』

大きくため息をつくミカ。

○夜、ミカの部屋

体育座りで深夜のニュースを見ているミ
カ。ケータイをにぎったまま、ごろんと
転がる。

○夕方、ローカル駅

待っているミカ、めっちゃ嬉しそうな顔
に。

電車から降りてくる、荷物を持った男(隆
司)に思いつき抱きつく。暗転。

○昼、ミカの部屋(夏)

窓の開いた日ざしの強い部屋で、Tシャ
ツ短パンで麦茶を飲むミカ。

時刻は8時15分。朝ドラをつける。

ミカV O「いまだに、天気予報は東京を先に見
てしまったり、チャンネルを間違えてしま
う。じぶんの中に、東京という癖が残って
いて、イライラする」

TVを消す。

ミカV O「隆司は一度来てくれたけど、あれか
らメールも来なくなった」

○夜、飲み屋

ミカと同僚の男(悠一)。

ミカが泣いて突っ伏す。

ミカ「もうダメかも知れない…」

ケータイメールには、

『隆司 5月6日 やっと家についた。

また電話する。』

ミカ「だってコレもうちのメールだと思

う?」

悠一「(宮崎弁で)遠い所に住んでんだからし

ようがないよ、どんどん、時間ずれてくのは」

ミカ 「もう電話待ってるのやだ…」

悠一 「俺が電話してやるから」

ミカ 「え？」

悠一 「はじめてデスクで会った時から言おう

と思つてた。俺が電話してやるから」

ミカ 「…」

悠一 「いいですよね。」

○夜、外

ミカが待っている。駆けてくる悠一。

強引に肩を抱く悠一。

ミカ、後ろを見るが、そのまま悠一に連れられてゆく。暗転。

○朝、ミカの部屋（冬）

粉雪の舞う窓の外。部屋にはストーブ。

朝ドラを見ながら支度しているミカ。

TV 『ニュース速報 東京を中心に大きな地

震 M5.6』

ミカ 「え？」

TV 『各地の震度は以下の通り 東京23区

震度4』

ミカ 「嘘…」

ケータイを取り出す。

かけようと『隆司 090-XXXX-XXXX』

ミカ 「でも、今さら何話すのよ？ ゆれた？

って聞くの？ 何電話してんの私…」

つながってしまう。

隆司(声) 「ミカ？」

ミカ 「ゆ、…ゆれた？」

隆司(声) 「えっ、何で知ってるの。」

ミカ 「地震速報。」

隆司(声) 「あー。すっげーゆれた。でもぜん

ぜん大丈夫」

ミカ 「良かった。」

隆司(声) 「…元気？」

ミカ 「元気だよ。…」

隆司(声)「ホントひさしぶり。…電話できずに
ごめんね」

ミカ「こっちこそ」

隆司(声)「何で電話してきたの」

ミカ「あ、地震」

隆司(声)「あ、…そっか」

朝ドラをぼーっと見つめるミカ。

ケータイから、TVと同じセリフが聞こえてくる。

ミカ「え。NHK、つけてる？」

隆司(声)「うん。朝ドラ見てた。…あ、そっち

も同じのつけてるね」

ミカ「なんで？…」

隆司(声)「え、だって、同じもの見ようって約束したじゃん」

ミカ「したっけ？」

隆司(声)「したと思うよ」

ミカ「でも」

隆司(声)「まあね。(笑)惰性かも」

ミカ「私、ずっと見てたよ」

隆司(声)「え、じゃあ〇〇の兄さんが実家から

出てきた所、見た？」

ミカ「見た。見た見た」

表情が明るくなってゆくミカ。

ミカVO「遠いふたつの場所で、同じものを同時に
見ている私たちは、ヘンだとも思っただ、不思議な
気持ちになった」

朝ドラは終わって、ニュースの時間にな

っている。
電話は続いている。

ミカVO「ひさしぶりに旅行したくなった。
行き先は、東京だろう」

暗転。

タグライン『日本全国は、NHKでつながっています。』

タイトル『公共放送 NHK』